

# 昔の囲碁プログラムの棋譜紹介 (1991 年 Ing Cup)

清 慎一

## 1 はじめに

今日では各地でコンピュータ囲碁の大会が開催されているが、最初のコンピュータ囲碁の大会は、いつどこで開催されたのだろうか。

囲碁プログラム Go4++ の作者の Michael Reiss の WEB ページの中の <http://www.reiss.demon.co.uk/webgo/ACORN.HTM> によると、The Acornsoft Computer Go Championship という大会が最も古いらしい。1984 年 1 月に開催されたこの大会は 13 路盤の大会で 8 プログラムが参加したとある。

さらに、<http://www.usgo.org/computer/results.html> によると、1980 年代に開催された大会は表 1 の通りである。

表 1: 1980 年代に開催されたコンピュータ囲碁大会

大会名称	第 1 回大会開催日
Acornsoft Championship	1984 年 1 月
USENIX Tournament	1984 年 6 月
Ing Cup(応氏杯)	1985 年
ヨーロッパ大会	1987 年
北アメリカ大会	1988 年
Computer Olympiad	1989 年

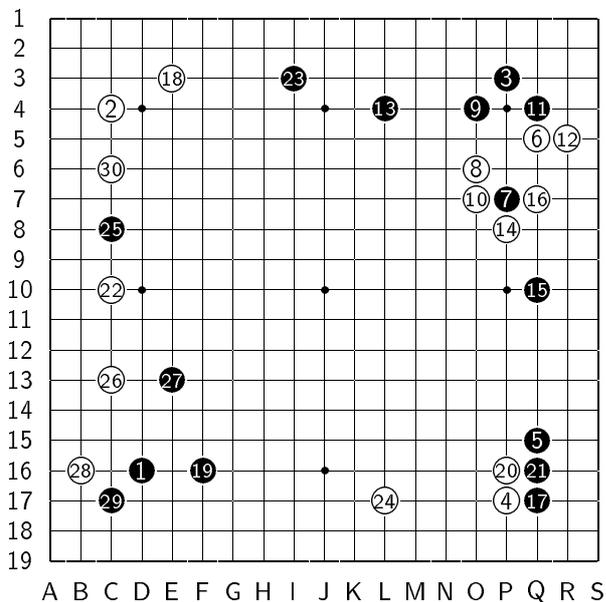
同じ WEB ページに大会のレポートや棋譜が載っていたが、大会結果と棋譜の内容 (プログラム名や勝敗) が食い違っていたり、終局まで棋譜に記録されていなかったりと、ちゃんと保存された棋譜はほとんど無かった。そこで本記事では、記録の内容が信用できそうな 1991 年の Ing Cup の上位のプログラムの棋譜を紹介したいと思う。

## 2 1991 年 Ing Cup

1991 年の Ing Cup の成績が <http://www.reiss.demon.co.uk/webgo/ING91.HTM> にあるので付録にも記しておく。優勝は 1989 年から 3 年連続優勝の Goliath。優勝の Goliath と 4 位の囲碁 III は、既に商品としても販売されていた。3 位の Dragon は、Macintosh 上で動く有名なフリーソフトだったと記憶している。

### 3 棋譜紹介

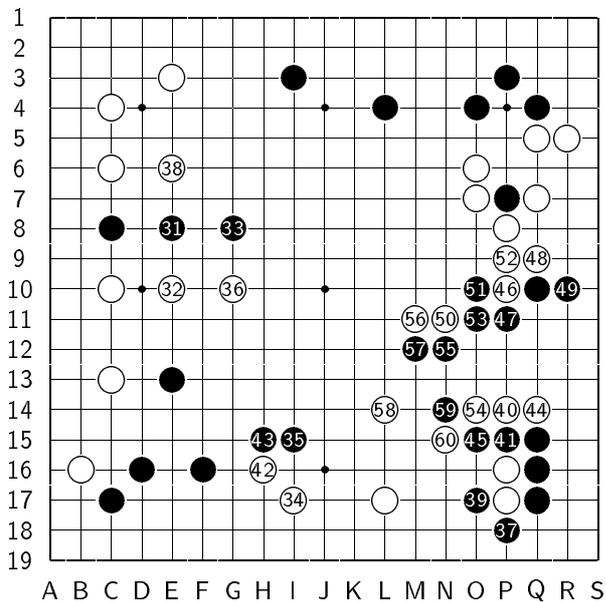
#### 3.1 Goliath(1位) 対 Go Intellect(2位)



Goliath の黒番。

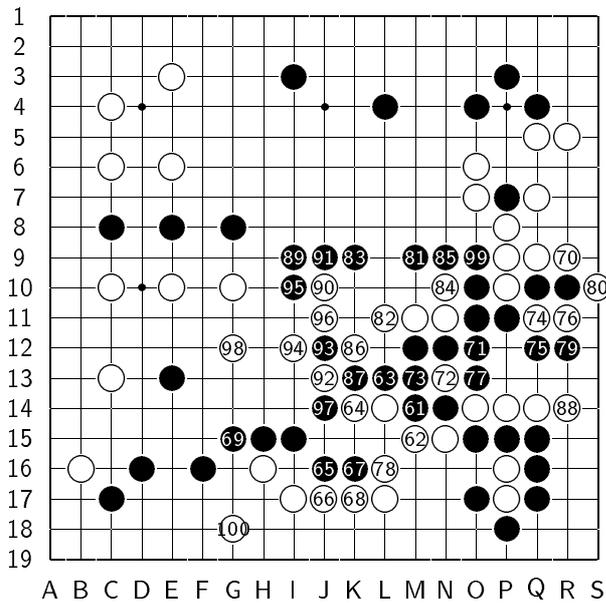
白 22 は右下を打ち続けるべきところだがソッポを向く。しかし、すぐに白 24 と右下に戻ったので、ヒラキの重要さはわかっているようだ。

その後は互いに大場を打ちあっていて、布石の基本はわかっているようだ。

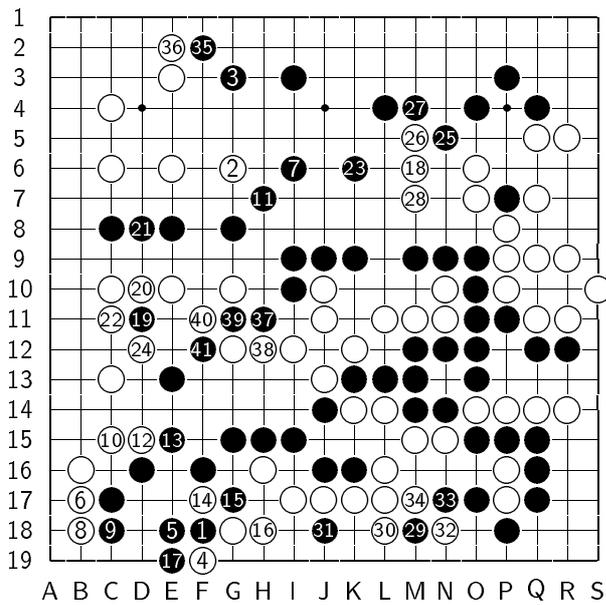


白 38 は右下を抑えるところ。ここから急に弱さを露見する。白 40 は、白 2 子がゲタで取られないようにするために打ったのだろうが、黒 41 のアタリに白 42 と手を抜くというチグハグさ。しかし、白 44 と抑え、白 46 から右辺の黒を攻めていくところなどは、着眼点は悪くない。

ときどき大きな手抜きをしたり、スキが残る手も打つが、流れは十分囲碁っぽい。

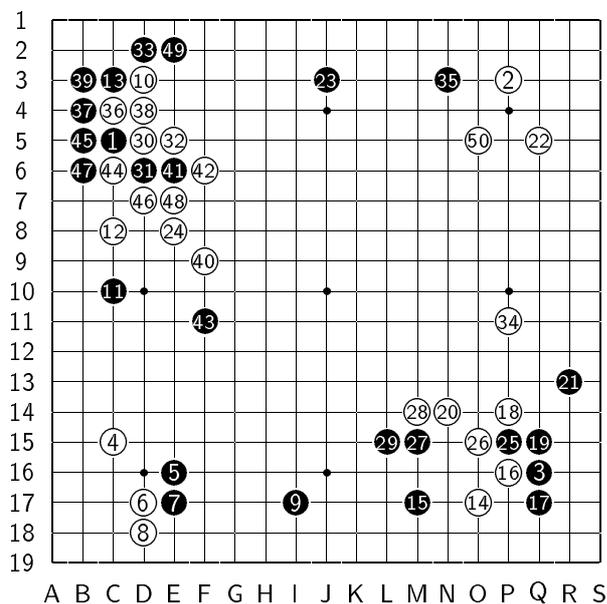


右辺で大きな戦いが続いている。  
 この間、両者ともにソッポを向かずに戦い続けているところは素晴らしい。  
 白72と眼を潰したり、白84とケイマをのぞきにいったり、白88と渡りを止めたりと、白は黒を取りにいこうとしているようすがうかがえる。だが、ちょっと無理。黒99とつながれて逃げられてしまう。



右辺が一段落したので大ヨセに入る。  
 黒31は中手のつもりだろうが、黒29の1子を取られて、白は難なく生きる。この程度の死活はわかっているようだ。  
 この後、黒37の両ノゾキから中央の白が分断されて死んでしまい、大差で黒が勝った。

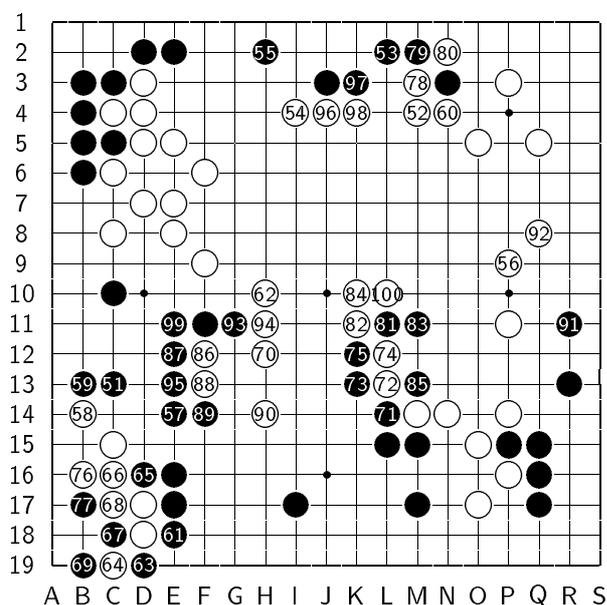
### 3.2 Goliath(1位) 対 Star of Poland(5位)



Goliath の黒番。

白 14 はソッポ。しかし黒も定石だからと付き合う。白 22 も左上に手を戻したいが黒も上辺に開くのを阻止するために付き合う。白 40 は何だかよくわからない手だが、黒 43 と付き合ってくれたおかげで、白 44 の切りから黒 2 子を取った。

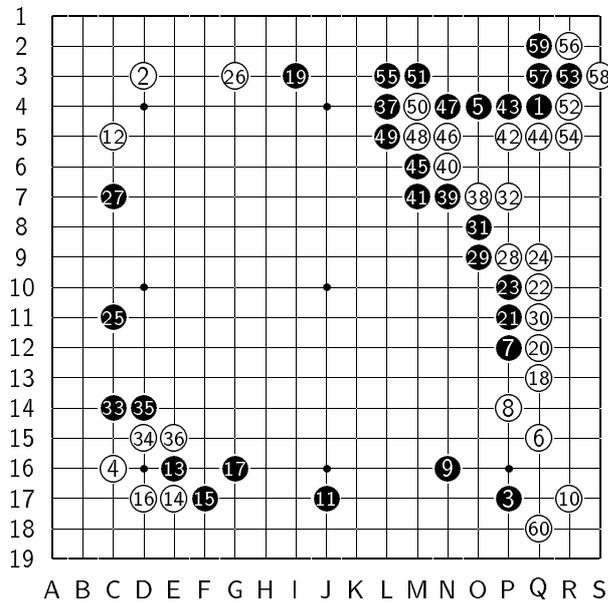
基本がわかっていないようで、わかっているという感じの不思議な進行。



黒 53 は、単に受けると二間の接続が不完全だと思ったからだろう。初期のプログラムによくある打ち方。

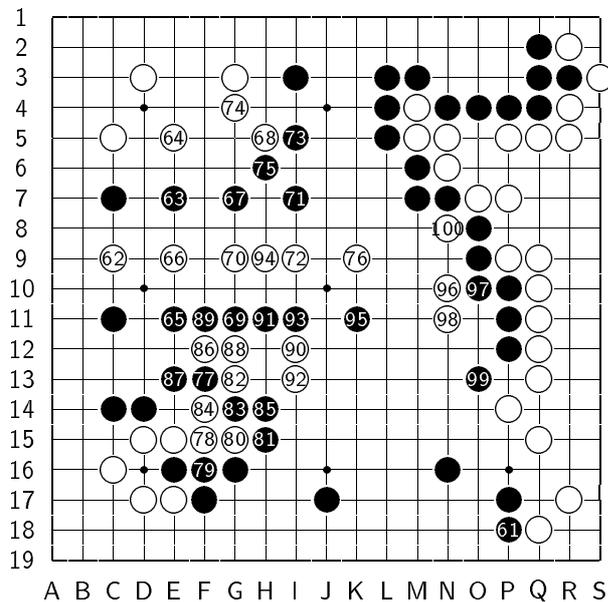
黒 63 から左下隅を殺したのは見事。白が正しく対応できなかったとは言え、スキを逃さず打つところは強いと思う。

### 3.3 Goliath(1位) 対 Dragon(3位)



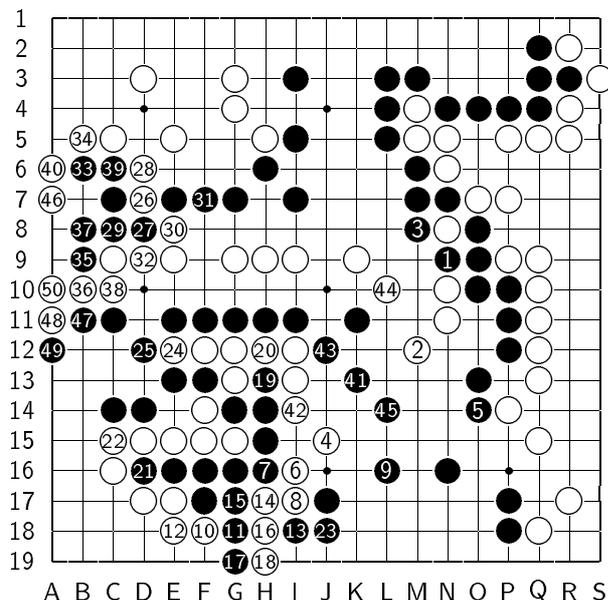
Dragon の黒番。

白 18 から白はどんどん地を作りに行く。黒に巨大な厚みを作らせて損をしていると思うが、当時のプログラムではこの厚みの認識は難し過ぎるか。しかし黒から見ると白に地を作らせないような手は打たずに、厚みを築いているのだから、厚みの価値を認識できているのかも。白 56 のハサミツケのような手筋は知っているようだ。



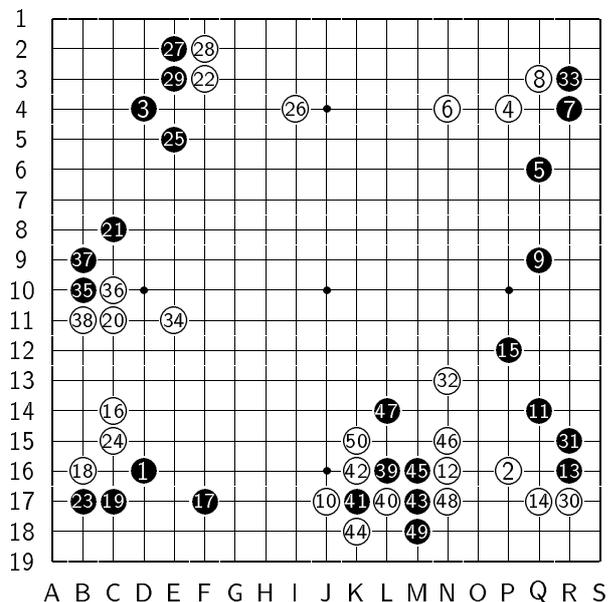
白 62 の打ち込みから逆襲。

黒 63 ~ 黒 71 まで一間トビで攻めるのは手緩い感じがするが、白は相変わらず苦しい。白 96、白 98 と効かしを打てるのは当時としてはすごいと思う。

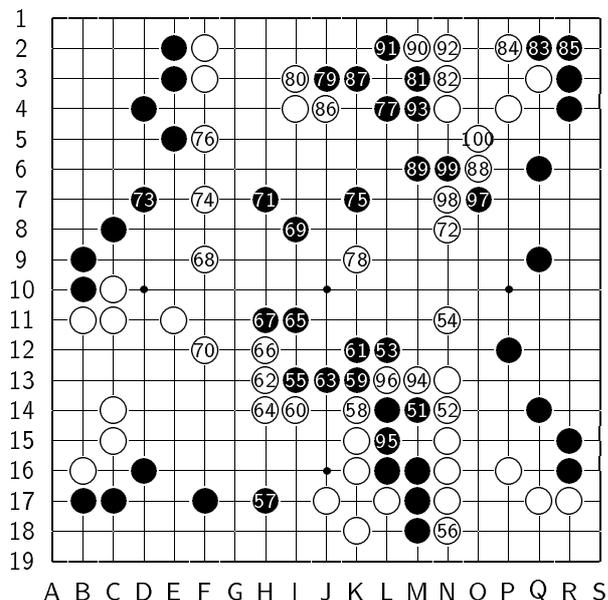


黒が優勢だったのがここで逆転する。  
 白6のノゾキから左下の黒が取られ、  
 白26の割り込みから左上の黒も取られ、  
 白が逆転。  
 白56右上隅のハサミツケ、白96、白98  
 の効かし、白126の割り込みなど、部分的  
 な戦術で白が上回っていたようだ。

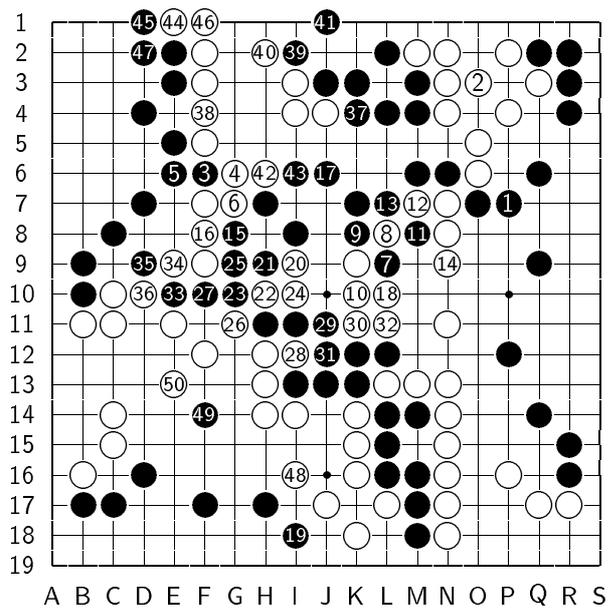
### 3.4 Dragon(3位) 対 囲碁 III(4位)



囲碁 III の黒番。  
 白20まで、まるでプロの棋譜を見ている  
 かのようなきれいな進行。  
 両者、二線の手を打ち続け、そのままヨセ  
 に入るのかと思ったら、黒39から戦いが  
 始まる。



黒 61 は意図がわからない。黒 71 も不明。  
 バグだったのでしょうか？  
 白 94 ののぞきにつながなかった黒 95 が  
 大悪手。すかさず、白 96 と黒 6 子が取ら  
 れてしまう。黒 95 は、黒 4 子のダメを増  
 やすことによって、黒 4 子を助けたと思っ  
 ているのでしょう。



白 22 に黒 23 と受けたが、白 24 に両アタ  
 リしなかった理由は不明。両アタリの評価  
 は難しいことはわかるが、前譜に続いて黒  
 がボロボロ取られて逆転される。

#### 4 全体の感想

上位の対戦を4局紹介した。10年も前の大会の棋譜だが、上位のプログラムは、かなり囲碁らしい感じがする。定石も知っているし、定石はずれを打たれてもヒラキやツメが打てるし、厚みも作れるし、手筋も打てるし、簡単な死活も分かっている。10年も前だからと言って侮れません。

でも、大きなところを手抜きしてソッポを向くところとか、わけのわからない手を打つところなどが、時々見受けられます。今のプログラムは序盤から石が接触するような厳しい打ち方をしますが、10年前のプログラムの序盤は一問トビが多く、無難な進行が多い気がします。また、10年前のプログラムはわかりやすい手は逃さずに打てるけれど、どこに着目すれば良いかが難しい局面での手が、今よりも劣っているように思えます。

私の主観ですが、今より4,5級弱く、6～10級といったところでしょうか。

#### 付録 (1991年 Ing Cup の成績)

順位	勝数	プログラム	作者	国籍
1	6	Goliath	Mark Boon	Netherlands
2	5	Go Intellect	Ken Chen	USA
3	4	Dragon	TungYueh Liu	Taiwan
4	4	囲碁 III	実近 憲昭	日本
5	4	Star of Poland	Janusz Kraszek	Poland
6	3	Handtalk	ZhiXing Cheng	China
7	3	Stone	KuoYuan Kao	Taiwan
8	3	Modgo	Knoffle	Germany
9	3	Mac	Won-Ho Jee	Korea
10	3	Many Faces of Go	David Fotland	USA
11	2	Nemesis	Bruce Wilcox	USA
12	2	Hirartsuka	Shigyou	日本
13	1	Explorer	Martin Mueller	Switzerland
14	1	大本因坊	吉川竹四郎	日本
15	0	Go	Yuzhi Yang	China